



数算集
四

13
115
4



新著聞集

勇烈篇第七



凶年^{くわうねん}と厭^{いと}ひる^りて親子^{おやこ}氷^こり没^{ぼつ}す

佛船^{ぶつせん}和尚^{わうしやう}句^くと吐^つて賊^{ぞく}と^りり

鰥婦^{くわふ}狼^{ろう}と害^{がい}す 女夜盜^{にょだう}と擒^{とら}む

童僕^{どうぼく}辱^{おとし}と過^{あや}自害^{じがい}す 寡婦^{くわふ}夫^むの奪^{うば}鼻^び首^{くび}

美麗^{れいれい}少年^{せうねん}義^ぎと思^{おも}自殺^{じそく}す 愚^ぐ夫^ふ童^{どう}と誑^{あざわ}て被^か疵^{きず}

強^{つよ}力^{ちから}重^{おも}擔^か耳^{みみ}力^{ちから}得^え金^{かね} 信州^{しんしゅう}高^{たか}遠^{とほ}大^{おほ}蛇^{へび}と斬^き害^{がい}す

童子^{どうし}狼^{ろう}と害^{がい}す 老父^{らうふ}圍^い碁^い聞^き二子^{にし}と

虎勇威をばそる

讒を討身と立

幼年人々討義成

乞人理不伏して火小入

樵夫搜り上り大なる嘍と截害す

火を望んで睡り熟く肝藏り毛を生ず

大鎗扇はくく弄ぶ

犬虎より不噬

至心火定身義不乱

壯夫自被遺書詩歌

高屋權太史討倭者

積聚と截獲長壽

少年乃矢數

陳茶開泰



凶年と厭ひ苦て親子水了没す

天和乃と一穴おほき、飢饉して餓死する者都鄙に

多し、水了りし江戸あま橋乃ほくろと時々徘徊せし

浪人たりたりも男幼きふと伴ひ携はめりて糖と

そはくりせを並ぶ暫く待べしそはのちのちの

よりゆりゆりたるはたも想ふて身を合せ浩く

波浪れ中より飛入りしを往來の人これツくと云し

誰もて引揚るてもかろしと返す水

底方よりゆりゆりし良なりて年高なる翁の頭ハ雪

て載き腰ハ了て張色くらく瘦むらへ右乃身ハ
數珠をりも左乃身ハ杖をたきもろほひ素りて
かの幼きもれを及てやし親父ハいけへひくせし
いひく橋了り赴き、往ま乃令了りもくせすて
そまハ自の子にていれりも昔時ハ免され此も
世を憂ももろのそ言せりうの親父ハ旬あ
かく辛き世了りたすもくありしと雄言嘆し
多しも所まかり孫を連出し百がり不審なる
ひりて遊と遊くうんまきまりしおぬハさふて

しる暫く待て又夏途黄泉まで親子に契争で
おられあやしくいも果下漫くう中に飛らしを
又し人しく袖をぬきあり凡そけらるは
乃衰ハ多かりしがむらもれりハ教ひ侍らじと也
佛船和尚句と吐て賊せり

上州大久保村乃龍雲寺へ天和三年十月に盜賊
入し時佛船和尚頓て起出ぬひ竹篋を持楊を説
今朝起出小龍窟 脚下分明十月天
凡俗不知之一句 白雲不礙四禪天

云もつへに賊徒と無二無三了打き一一人ハ
即坐了歿了残黨ハいきほひ了恐もちるまくに
逃去一和尚則ち竹藪と成骸了袂に出院一
たまふけりまひ取へて殊勝乃働かり飯寺
まひして再住かりしと也

鰥婦一狼を害す

武州播磨郡いふ村乃左左衛門しり者耕作に
出て狼了くし教ゆき一二十歳をかりれ妻の
口惜きゆにむらひいづはき一て狼とてうらうらんと
あ人捕

乃と狼と提ち方くと殺求り一はつる畔に大なる狼
か一五うらとまきと夫乃かきとて晚いしと件の
繪とてしと一咽うらととけしと一は狼奮ひ
怒て起つぐんととて一か中し繪を放りけしと
聲とてとてれと人つと馳まるとはわると折殺し
てあり舅地の志乃貞節からと感一聲とて見
家とてはとるなりとちり

女夜盗を擒

江戸堀江町乃某やへお登入り亭主と切り殺り

妻起出て聲を立しうば盗人逃出中せむら
ふを逃うあ足と捕へて引あつて戸を閉まて
盗人のうへに倒さしうば頓て壁へかゝり大音して
生捕さうと叫びしる人さうのあつて掘らうけしもの
王子乃子樂寺乃何のと報せし古著長左衛門と
り強盗うり奥平寺ハハ女れ伯父の夫と伯父の
敵と女れ身にして生捕ハ目果れがまかたはる
あも勇から振すひやと誉感せれるはらうり
童僕辱し思て自害す

神保左京亮殿の家来黒押仁右衛門といふ人の相部屋
乃何氏物矢りしとて遠くまで詮義た
召仕乃小野即し縛てあつて外ヨリあつて
あつて後少部々々我賤しもの
しに羞むかきかてかく縛めれ耻し達ゆもの
口をさよと獨り言して恨しと傍輩あつて
少も恥辱しつらうと掛る教訓しあつて
ひさすにねのい究めしはあつて自害しあり
かく斗乃猛志いさる先祖と想やれしと

人よにおくしぬがかりかたりししとらん

寡婦^{くわふ}夫^と乃^{すなは}鼻首^{びしゆ}と奪^うふ

大坂上八町目札乃^{おほさか}过^り乃^{すなは}町^{まち}乃^{すなは}鎗權藏^{やうごんざう}とて溢^{あふ}者^{もの}を

博奕^{はくやく}又^{また}八人^{はつにん}請^ひ了^りたちしおそのまゝ人^{ひと}欠落^{けつらく}しき

と主人^{しゆじん}より崇^{たか}らまのまゝをこれ罪科^{ざいこ}きり取りて禁^{きん}

獄^{ごく}しほめりし鼻首^{びしゆ}ちりまきし此^{こゝ}をまの妻^{つま}をよせ

させし成人^{せいじん}乃^{すなは}子^こを咄^ふゆせ女^めのまゝ父^{ちち}はしてのちま

やく我^{われ}かくして何^{なに}台^{だい}上^{じやう}の親^{おや}より何^{なに}の^のまゝの頸^{けい}を晒^{さら}

しとまんり其^{その}心^{こゝろ}憂^{うれ}しといふ今^{いま}甯^{なや}頸^{けい}と登^{のぼ}らんやと

何^{なに}もぬが子^この口^{くち}を毛^け及^{およ}程^{ほど}の^のちま先^{まへ}の儀^ぎ乃^{すなは}

恐^{おそ}まをるりのちまが叶^{かな}ふ何^{なに}もきと一向^{いっかう}りそめしかど

東^{あづま}漸^{なほ}く更^{さら}て子^こを極^{ごく}し甯^{なや}り何^{なに}の^のまゝ自^{みづか}ひ人^{ひと}

すほめいきり何^{なに}もそ目^め指^さもあぬ黒^{くろ}暗^{あん}り只^{ただ}人^{ひと}

すほめと獄^{ごく}門^{もん}場^ばり何^{なに}も何^{なに}も懸^かりし頸^{けい}を探^{たづ}

り乃^{すなは}夫^との頸^{けい}ハ異^い人^{ひと}よりまも大^{おほ}きなりと申^{まを}して難^{なん}か

くおらりし少^{せう}橋^{はし}乃^{すなは}寺^{てら}町^{まち}乃^{すなは}菩^ぼ提^{だい}所^{じよ}をりし頼^{たの}て

火^ひ葬^{さう}しきりし後^{のち}の欠^け落^{らく}せしまゝ人^{ひと}を地^ち所^{じよ}

りて足^{あし}付^つて何^{なに}も何^{なに}も刑^{けい}罰^{ばつ}りあひりし

はま乃歌乃がけごと云り此をかの者か好なりと
松崎とぬく取と飛やらし捕へて公儀よりあつま
新へしはわたり頸刎らまうしつらう

美麗乃少年義せたりひ自殺す

武府東叡山乃青龍院乃扈從喜平こそ十六歳
ありしお容儀艶麗ふし心さぬいそやうかじし
あつに河平坊重とゆやく願憲し三位とらふ
傷せたるこそさゆ云かりしうとる人の意はた
けりりいりぞる不義の及り入るべきとて文心せ

とせけりしるハ重之物はまうに堪ふ我部屋にて股を
突ぬきて喜平とひそかり招きかくるると思ひし
ゆかきいふとまふれを頓て少油乃裏をまう
破り綿をまら出し流る血と拭ひけり業はめて
あまより昼夜人めて忍び看病し痲やけく愈て
後乃朝喜平証金乃日高まるて咄ゆし
玉泉坊より納所ゆてたきしり音もせ
何やとて戸を破りてまねを机よりもたき眠
君ありはなれりまうとまより起さんとすりに別

脱^ぬげ腰^{こし}一文^{いちもん}を^かき^り切^きり通^とし^て其^{その}刀^{かたな}を^はき^り置^おき^て
灰^か一^{ひと}ぬ^くの^りに^に書^かき^置乃^{すなは}ち一^{ひと}巻^{まき}を^かき^り置^おき^てす^を終^はして
朝^あす^けに^に治^ちす^を命^{めい}せ^らる^るに^にお^のり^のれ^となり^し病^{びょう}の^の上^{うへ}
こ^のり^しを^を助^{すけ}け^るも^も嘆^{なげ}き^に堪^たへ^ず護^ご國^{こく}寺^じに
走^はり^て我^{われ}心^{こころ}を^を出^いで^しり^のれ^を増^ます^を置^おき^て自^じ害^{がい}
せんと^しある^を喜^{よろこ}平^{へい}母^ぼ及^{およ}び親^{しん}族^{ぞく}き^つあ^らる^を
い^いち^ぢぢ^ぢ止^とめ^しう^をか^かり^て髪^{かみ}を^を剃^そり^て高^{たか}野^の山^{さん}に
お^のり^しも^も評^{ひやう}を^を吊^つり^しる^を寛^{かん}永^{えい}十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}秋^{あき}乃^{すなは}ち
の^のり^し

愚^ぐ夫^ふ童^{どう}を^を誑^{たぶら}し^て被^おし^やす^を病^{びょう}

大^{おほ}坂^{さか}に^に獄^{ごく}門^{もん}乃^{すなは}ち頸^{くび}の^の事^{こと}を^をし^し時^{とき}伊^い藤^{とう}丹^{たん}後^ご守^{しゅ}殿^{でん}
器^き量^{りやう}を^をあ^らわ^せん^がて^て少^{せう}年^{ねん}乃^{すなは}ち者^{もの}を^を何^{なに}の^の先^{せん}誰^{たれ}も
か^の獄^{ごく}門^{もん}場^ばを^をし^し必^{かならず}ず^とし^てや^とめ^しし^てい^いは^はす^をし^しる^を六^{ろく}十^{じゅう}二^に年^{ねん}
ろ^ろろ^ろ茶^{ちや}坊^{ぼう}を^をす^すし^て出^いで^し腰^{こし}乃^{すなは}ち物^{もの}拜^{らい}領^{りやう}し^しな^らば
ほ^ほり^しら^んと^と云^いふ^をに^にい^いは^はす^をし^し一^{ひと}腰^{こし}を^をい^いじ^して
よ^よと^とい^いふ^をの^の取^とり^しし^て後^{のち}乃^{すなは}ち證^{てい}拠^こを^をし^して
飯^いや^や頸^{くび}の^の口^{くち}を^をし^して^て一^{ひと}の^の頸^{くび}食^く音^{おん}し^しあ
る^をと^とし^しも^もさ^さら^らに^に立^たち^ある^をんと^とす^する^をを^をし^しる^を

一口のひししと云せりや會せんと言へば眉間を
ぬきうちりして死人何事もなかりしがと
問ふ多しハかゆの侍りしと云ふは又いふ
動轉くも入るにしや馬名十ハ義年ハあり
かまはあどあかき切しと定ておもきらん
そし信乃者下懸り云くや伴ひんを
そ先ハ流りしれにの者おとけなく己
首を直下りれおれとせしに案にお遠して
肩おろして瘡を破るのそ世乃笑あしけりし是

いめ若年ハ安藤乃刀派は冬廣の子也大坂陣乃後
冬廣ゆくれを殺しけり終りてをばりしは
計ハ一人とせしと云ハ梨

強力重く擔ひ耳力得金

勢州松坂乃藤田又ハ江ノ本町より國許へ上りて
けり柳よしし出立りし町人の為物
かくてハ馬出さしと云又ハ日口ハ利源と云
高人ハ武士より負てもほしきものもたれ
義ハハ定乃通りけしやれよ左もなくハ

多向一きと云ふれを馬方をもよほでいつては
ふふやち笑い嘲一は是非一馬出さずん
自ら負ておべ一こそ同屋乃者乃存也
如命とせしは多希園儀二筋とて怪く
馬子ぶし様とあきう一か向さるてかくハ
乃取一いつとふハ向ぐきをその時お
うんとして馬乃曹とひき、蹄つつき
味一おししは人とのきれとて人間乃
いと恐ましとあり又いハ一いつし時
幅一

奥へ三又乃戸柵とあり之へ太き
捧とて人ともし四番三年
了頃教やあうにはめ着
少いり多連着うて
者いさば左右へちがや
とあり一森四郎左衛門と云ルハ
しがはつて一後回又ハ
及ふまどとちまばるをも
強力なり大自の耳
及ふまどとちまばるをも

人々取らば一耳と持し一たし中問より小判一両
とらるる片耳といふ事小判おろしたる人二ハ家より
監へ又果えづんハてあやんべーの御来りて所にお
又ハ今ぞあやういれカと出く家一に少くも動しじ
後よりハ又ハ腰より銀をばあ平人あやういれカ付
いふしおど更りゆりがあししハ又ハ負て金を出し
あやういれカ

信州 高遠 斬害大蛇

信州 高遠より保科肥後守殿にのりて伊予太宰郡

蓑輪乃中大藁原より大蛇蟠居るなり一鷹鳥一匹
頭并深九節兵衛より組下り告りぬをいれぬのを見
りて毒置べーとてまじく深くつあ入りしに大蛇眠り
今朝乃音ハ白といくごごくらくと忍ひよりま
雑作より首をくちらぬくあれを頭たちやち地より
あやういれカ洞乃うごごるに地震れあやういれカ切はら
白き蛇乃立ちるなり俄く天カき曇り雷電四方に
いれりて雨大河よりすごく大雨を降らすなり
あやういれカ急き立ちて少頃乃地をた

多ふく大蛇^{トカヘ}一^ト人^ト進^マ多^ク来^ル今^ハ
進^ルれ^どと^おり^い抜^キ設^ルる^刀を^以て^ひく^ひく^切倒^ス
其^の形^も絶^ト然^ト一^ト人^トの^形も^漸く^連
二^三日^もや^て快^キ氣^一あり^雨登^ルや^と
別^もか^く三^日少^し信^州一^國ハ^洪水^一て
取^く損^ハせ^り晴^レて^れぬ^の地^一往^キて^れハ^頑
ハ^荒原^一の^洞ハ^小沢^一の^形し^又人^一と^ふ
此^れ利^堅い^らて^恐ま^る
童子^ト狼^トを^害す

丹^後岑^山嶺^ノ肉^をく^子を^もま^まで^りと^妙一^一
狼^乃出^し一^のバ^をく^途作^りし^と葉^をる^女乃^子
途^中に^狼を^見ま^すと^十一^歳小^の兄^竹藏^途
お^ぢう^これ^を取^て一^持て^て狼^の眉^を
一^ちう^ちに^引ち^り鼻^柱を^切り^き
狼^ハ嗽^へ一^子と^一竹^藏が^頬を^舐め^る
く^ひひ^ひと^引ち^り咽^を引^き
し^は狼^を一^竹藏^が絶^ト然^ト一^人
あ^らと^人に^走り^て一^野を^走り^し

疾平愈して後守護乃京極王膳正殿さうこく
父して奇特乃者あつて召出さるゝとあり

老父圍碁二子の成せきく

藤堂殿の内より山岸喜太郎同弟庄三郎とて
勇士河津が大坂陣より兄弟もつゝもむら
又岩之助ハ老躰して伊賀乃上野よりつぎ
何日喜太郎を討て敵れ首ハさうししか
鉄炮よりついでにありあり親乃もさ
きこゝりおふゝ父ハ碁とち居るしお母もく

かくして事終りしと鯛つく捕り父小やまを岩
夢て不仕合是非さうとむらう云て碁や
あり相違乃人先碁をやめとむといへる
たふし止しとも飯もせぬとぬれいよく庄三郎ハ
何とありはんと口説おれと居る弟ハ一昨日討
成しとあり今朝城あてついでしと云い
母もさうな情さうありと聲のあつたり
はあれを岩之助のいよくいよく女つれはとて士
家より生まれていよくいよくいよく戦場かへる

或ハ定リシヨリヨリ活テ久クハ能仕合アリシ若
死スベキ場ヲテ逃テセシメハなげくベキヨリ
トテスゴクモ噪ぐ者もなきヨリし時表ノ物
ハ一生ヲ鐘十七兩ナクテ着ヤヅリシ勇者ニ
侍ヨリヨリ

虎勇威ヲ畏ル

大坂乃津ヲ能ク催マレ一日以テ所シガ程ニ
カシキ虎放ルル事出シテ諸人驚ニ以テ
四角八方ニ逃チリテあり秀吉公も此處ニ居テあり

大名小名も周章シテ手ノ下ニありし者ハ上
了秀吉公ハ伊達正宗加藤清正ハあり
了虎ハいきほひカラシ秀忠公目ヲテ侍前
椽ヲ翔ワグリスシヤトシテヨリヨリ
沖谷と内ノヨリニ椽カニ通リ正宗清正ノ所
了レヨリハありテ二人膝ニテキテ
ヨリヨリハ驚出シ虎ノシテ度ハ何カ他
實リテ大勇乃威リハハハ猛獸トテ
ノヤチの感伏セシマ

讒と討身と

田中筑後守殿能くしはるし時中百姓はそ侍
乃袴了し足かくるもれを主人乃用更はらめりて
只今乃るり許免可きと懇懇了りせバすにせ
くしやくびと云へし側らる人乃云しハ御免
ナセ反踏でも踏てもさうしかくぬかしく云くがらに
堪忍なりかくて相手の方へゆきか様くれり
討早了へし覚悟可きとものせしうは何分にも
相心ゆらゆらなりし處へ此方より左右了へし

書状調へ置てかの讒者此部屋にひき不届の
ねしき云立切報し首とるも相手乃方へゆき
うれえし由へ能はるる設けし末期了酒とんえ
三献了ししち取へ大勢多つち委細とまき届
る人乃許しせは大了感なきぬい相あへて
果とづかしび左様乃者ハ家乃騒動乃本あり
一族ども意趣となへしとて作らましくなり

幼年人を討義

田中筑後守殿家中の子ももり合空市と

何とい十五歳なり者七歳乃者の頭とらるる
ありし何糸幼きとて士乃面とらるとりしや
るへきと詞を流ぐひ地のち四五日終て十五歳乃
者何心もかく遊ひ者ありとすくくと走りて
只一討つりきり殺しけり家へ皈りかき乃
侍りし親を告るれを親大に怒り相
和乃方りて一みの親けり子の不覚ありと
かしのもつりすつて男けり志の子とひ
家と流るもつり侍りし一向り云いと被り

きく届ありとて養子なりとて名ハ悦ありとて
とも善なりとて悪なりとて多美子の妻とて好い出
ぬりハありとて只士乃義理なりとていふ人
ありとて人をうらて活てハ若られとて法あり自害
せり

乞人理り伏して火に入る

美濃郡上郡遠藤備前守殿城下の寺は普閑
り相とて雪乃日火葬しあり葬場
乞人妻り供也とて父よりして同姓乃はた

見解て仕りくうりや一き者かまはとしてその供物と
奪いいくぐくの齡とらたもらんや母とにさきも
りきもも道れがりハ死乃及なり此の津にも
ふくにぬり命ハくらふきとあもくありれり示
りもあれハ乞自ちたまち業起くはとふはれを
しんそくへつりやき教化のまといも巧比薦と脱
とと合せたかろろ一念佛一燃あがる火葬乃内ろ
とい介しりとあり

樵夫棲り上り大らる嘘と截害了

泉州谷乃輪乃守山の樓の根り河原の穴り
樓蝟の撫と人たもきせありなり一はる時と惣と
しつ者此の樓の枝とあらして薪りせんとおゆく
をさるりとさあり一はぐ何糸るのほぐきやとてま
れがく枝と切り一件の穴よと嘘れらうおてよ惣と
目りしりちあふり上りふを待り多謙をまをま
嘘の眉男の正中りしりちらん引りれくはすぢの樓
御とあちまほろりてう功り倒さく一経り美も
木も根りしりあまをよ惣とさしり毛驕がはねり

寝たておろしてりち睡り友達くうくく泣くハ
めてよりいよお毛置ぶらておそろくうくく無
毛頓て煩づき二十日どろろ終て終くく深
き毒なすしつりあろしや

望久熟睡肝藏了毛と生下

蒲生下野寺殿家来乃士由つて切腹するに水と
をぬい檢使了、向てつとハあすし湯つぐさるハ度
癖のある也ホの世のなりのあすし移させてたぶよ
削りきて良久くは寐て目とさ痛く起つらりま

檢使了いひつらつら強勢の者るハ肝ハ毛乃
生るくしりしるますつらつらつらハ恐らくハ
某ら肝了も毛生てはらんあすしはあすしたのむ也と
て切腹せしやせくのぞくおのくまうてんは
るらるる云くはなかりん毛生てつりしりハ傷
てつりし野倫菴といへる醫師乃つりし

大鎗扇のぞく弄

松平のまのちあすし戸ほりまあすし大カつら乃
もも陰幅四寸五分長く四尺五分乃身了控の本の

日月乃こくかくやく眼を尾をくしてゆく噛む
らんもせぬ嘆りさうく割き枝を折くなどしよ
むねりかりすりや折るきりの何さハ何さ見よとて
走り何のまう息をほめてみるまう虎ハまうに
猛きゆみく飛かゆまや犬ハ飛ち入て虎れ咽ハ
咀つきしや左右乃血おて分くふ引けまじい
犬ハちや咀つきし知をくらびして共く成る
けの河新了きこしめられて其犬乃出取とらひ
ゆせしふ了丹生山田了夫婦乃獵者何朝毎

了能物をまきくやく飯まうやいを尾せりて
疾くしゆくまハ犬乃飯口へまゆせりて鉄槍
と挺あゆに迫きゆりまて猪鹿を逐はりて
まうけりてあせるるを庄屋よりまきくは
あましゆのむの犬ハわあくや中らひあれハ
いりあつてほりひのちやうまこそやうけりて
しゆくゆきもるらうやけりひの犬馳了は去のけりて
あましゆのむの犬ハいりていりていりて
そのの犬とけりしあつてに夫婦犬とむらひ

涙と流しぬいなる宿縁了らるる今またその
夫婦をやさしくいほらん今夜庄屋が取為りて
非理り虎の餌らすする口惜くはるるもかに
およりび物と恨も敵と取て或すへりて死
口説し能言とや聞るはらんあかしくして
出ゆりて一人上やうり達しあれむ津所ふも
衰もがせしむひ庄屋がに根あききりりて
刑罰了らゆりも犬の跡吊へりて庄屋財室
おこりなく夫婦乃者了賜ひるるりりり

至心の火定身儀不亂

池上意三ハ大儒の譽れ世了りて十六歳にて水戸
黄門公へ召出され和漢乃萬巻了り眼と晒しい
いしき人りておりし佛縁乃りあつたや
何者時延命地藏經を執るしきまもち世に
てゆやく善提心強くおらして大守へおしむ
世にまもものりし曾節と名をゆりし形を桑門
へておら都あつて童の風車と弄ふて
桑の縁はゆい風車と弄むゆいゆい

と讀てあり 風車 軒くりりり 其の後 勝尾山 二階
堂へ 入るも 入りぬ 入りぬ 入りぬ 入りぬ 入りぬ
至て 火定 入へ 入へ 入へ 入へ 入へ 積せ 我中
香烟 出す 相圖 火と 相圖 相圖 相圖 相圖 相圖
世の 詞と 世

世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世
世乃 詞と 世

寧て 又 左乃 右乃 香炉 香炉 香炉 香炉 香炉
と 行儀 行儀 行儀 行儀 行儀
壯夫 自殺 遺書 詩歌

貞享二年 十月 兵庫 湊川 廣嚴寺 へ 往 住持 齋
見 歩きて 飯 食 朝 佛 殿 乃 側 林 中 乃 少
たり 取り 腹 一文 たり 俯伏 して
又 一封 の 書 野 夫 乃 遺 骸 乃 故 院

了葬^{しやうざう}す^はハ多^た生^{せい}の鴻^{こう}恩^{おん}ら^うと唯^{ただ}是^{こゝ}と希^{こゝろ}ふ^{なり}と
未^ま期^き了^り臨^{りん}に^て謾^{まん}る^に口^{くち}下^げさ^さく^て廣^{くわう}嚴^{えん}寺^じ方^{ほう}丈^{じやう}了^り
呈^{てい}了^り
攝^{たつ}成^{せい}信^{しん}

昔^{むかし}日^ひ義^ぎ將^{しやう}戰^{せん}死^し所^{しよ} 芳^{ほう}名^な堆^{たい}塚^{づか}旧^{きう}湊^{みなと}川^{がは}
誰^{たれ}知^ら月^{げつ}下^げ默^{もく}然^{ぜん}意^い 霜^{しも}葉^は隨^ず風^{ふう}松^{しょう}籠^{ろう}煙^{えん}

一^{いっ}途^とのち^ちも^もて^てた^たの^の心^{こゝろ}を^をて^て今^{いま}猶^{なほ}な^なれ^れぬ^ぬわ^わは^は深^{ふか}かり^{かり}人^{ひと}
と^とあり^{あり}し^しと^とて^ても^も只^{ただ}人^{ひと}を^をし^して^て死^しに^にて^ても^も漢^{かん}の^の尼^にヶ^が湊^{みなと}
訃^ふへ^へら^らし^しら^らば^ば檢^{けん}使^しま^まて^てお^おん^んこ^こら^らず^ず葬^{ざう}に^にお^おひ^ひ
し^しら^らし^しま^まの^の人^{ひと}も^もや^やハ^ハ長^{ちやう}門^{もん}國^{こく}毛^{もう}利^り家^かの^の人^{ひと}を^を寫^{しやう}は^は

丹^{たん}今^{いま}と^とし^しり^りハ^ハ名^なを^を意^い白^{はく}と^とし^しら^らま^まの^のせ^せし^し地^ちの^のく^くち^ち
舎^{しゃ}兄^{けい}を^をし^し黒^{くろ}足^{そく}士^し多^た桑^{そう}と^とい^いひ^ひハ^ハ人^{ひと}を^を廣^{くわう}嚴^{えん}寺^じへ^へ
使^し者^{しや}お^お来^きせ^せハ^ハ也^{なり}

濃^{のう}州^{しゅう}檢^{けん}査^さ使^し信^{しん}者^{しや}と^と訃^ふ

濃^{のう}州^{しゅう}郡^{ぐん}上^{じやう}を^を為^なる^る作^{さく}家^か妻^{さい}を^を檢^{けん}査^さと^とい^いひ^ひ
人^{ひと}を^をね^ね由^ゆり^りて^て信^{しん}人^{にん}の^の身^みを^をし^しり^りは^は戸^こ下^げに^にお^おき^きし^し也^{なり}
の^の中^{ちゆう}着^{ちやく}堀^{こり}壺^かを^をお^お抱^だり^りて^て家^か信^{しん}給^{たま}ふ^ふと^とい^いひ^ひ
と^とを^をし^しり^りお^おき^きし^しら^らま^まの^の身^みを^をし^しり^りは^は戸^こ下^げに^にお^おき^きし^し也^{なり}
て^てお^おき^きし^しら^らま^まの^の身^みを^をし^しり^りは^は戸^こ下^げに^にお^おき^きし^し也^{なり}

明道追つた一足もよめ長道具は極肉を
切りとり辛に下り成するものさへ手負に者十餘
人及びし自分も多く病と蒙門番と招き
きくはるを去るべきなりといひておろし
か、武勇いづる人の末葉とて弱しむる可畏
四代の孫としてゆしむるゆしむる振舞ひ
はるしむる人といはるるに
積聚と截長壽獲る

阿州安東利左衛門といはる人の祖母三十三歳乃時

甚く積聚しりしゆりしる看病の者れ隙をうけし
守り刀を以てしりし取て切り破り腸を引出し
呼ぶくは告ぐは皆人驚顛頓て外醫を招
き腸を付し積を去り捨て則腸をたし
療治せしむるは七日のち平愈りて八十歳まで
生ありてありしは積ハ七日のち平愈りて
後ハ蕪蕪乃にりしは

少年矢數

石川備中守殿家の子梶川勝花十三歳なりて

元禄十一年四月五日乃言了より翌日午に陣立て
 了は深川三千三石堂了て半堂を射りて熱敷
 一万二千二百餘を通り矢一万十本をけりいふに
 も射ぬらん鳥色なりしを矢師よりは小數乃
 射りて、以後了射手所をゆぐ左所にてハ我等
 義職なりしとて強ち了押へくは是非なくして
 了し皆く了て主人は若殿及ゆ小妻りぬりし小
 既了りみ平了と念りておぼくは了りぬり又
 百餘を射通しありとて主人斜りし悦ぬりし
 即坐りし百石に思禄ぬりしと云

備前守人... 尾門廣沃親王... 佐土... 佐土... 佐土...

新著聞集

倭奸篇第八

機嫌妄評

偽金愷人自詐失言

輕蔑の少年即被殺害

佐土原の城暴逆殺傷

寶塔九輪下爲鏝子

鄙格命と損下

不貞の寡婦二盛二衰

狸人を妖一却て取一

無根の詈言忽損身命

尾州廣沢親王

佐土海中題目妄説

本満寺像諍論異師

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 倭奸, 機嫌, and 不貞.

こぼれしつらねんとおのひさしりも素了おぼし
し身みの災わざいしつらねし

不負ふたの寡婦くわふしつらねい聖せいつらねい妻つま

信州下伊奈郡下流村の庄屋七兵衛とよ者の家来の

市いちとよ女顔めがほちひてやつりしは誰人の媒まへふてや

茂堂もどう大孝たいこうひなつ見つてに庭にわおも双ふた方かたなして

手具足てぐそくつらねし衣い裳ぢやうねふくよむり又またとよ

しとよ若世わかくよはさきさふくはや終はつつらねしつらね

つらね古ふるいしつらねしつらね又またつらね縁ゆかりつらねしつらね

原半はらはん左ひだり兵衛べゑつらねしつらね素すにつらね送りおくりは

つらね中ちゆうつらね獣けうつらね娘むすめと設しやうしつらね夫おとこ重おもき病やまひつらね

つらねつらね腫はれつらねてつらねつらねつらね後ご家けに

つらね善ぜん后ご村むら乃の百姓ひやくしやうつらね誘いざなつらね負おん女めれつらね

つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

つらねつらねつらねつらねつらねつらねつらねつらね

金かねとつらね人ひととつらね自おの詐ごう言ごんとつらね

伏見ふし見の女め若わ屋や毎まい日にち上のぼりつらねつらねつらね

と世の男女争て詰である位日堪上人にゆづりて
あるおれ儲の人と見えぬ不儀不儀といひ法問の奥儀を
きつひて若し返答なくば是等亦く此捨んと責む一正
何の意へしつりし上人頓て答へずとせし不儀を
おろしおれじ後の方より古裡逃出あると追はれし
討殺りしころん

輕蔑の少年即報害せしは

天和三年の秋吉良上野介子息三郎殿みまゑりて
近所の侍少衛門をむすりて人形をばいと仕へし

奥方より機嫌よくて悦ひしうとて重ね内おほらで取
ぞへ出まれしと関流を衆といひ者少衛門をばいと仕へし
甲しき者くまき君の者の志似として賜正し酒肴
何の志のりありや武士たらん者の喰へきうな某を
人形かばもよにもろじと散くすう罰を多敷と
怪らすの狼藉やもあつし思ひしやもつぬ聲で
誰ぞびる人からうじし翌日のあつし法義隣の部屋に
ゆき餘の者もまうほのこちりて一件の少衛門を
呼て一盃吞せて又一盃とすめられむイヤ清和の

終つて砕てハ出ざりて免く一命ハとて搦りに
深氣ハ時人留りてきりぬらぬと絶やう取や
搦れ少くも吞ゆべきか責もれど力なく二三
献傾きし餘の者ハ砕りて門ふと
に急も云ぬる仕散す音の響しく亭王驚
頓て走り出ぬの何く侍やおと女抱せしをり
其の際り少頃を深氣ハ後り海り出り
搦捨りて突ちやのどろろと云く急めしつら
亭王立戻り双の中を押ししき男ふへと何ま

出入り扱りのハ幸意ハ遂成またよと負せし事
らもバ真家乃親里上秋後ら王役人妻りたり
立合少頃を口書せしありに過り口の悪口又
おあより既てくると手や捏などせし口惜く取り
かど若年又ハ坊をりて何りしうはあきて堪忍
何りし能らり今あもかく何りしが隣の人又亭王
もたせが故なきに余人り誰とあかんや
ためりし隣の人痛く砕て飯りして亭王送り
如ぬるや究竟の所と思ひ定て侍りし

如急を遂す所多しと妻しく書れをくし先
貞の疵を對しありるす茶法へ御押せ立殿へ
れ一こと告りし小沙彌不作法者なりと地獄
らま少坊もりの祿州乃者ありて証化す御
まゆり一也

無根の詈言なすち身命を損す

何れ下答りて何る浪人誇りて小便せし侍
人通りて刀を振りし如き所ぬ祈りて之誰
浪人存りしハけ人見ちるがれハ意恨ちる寺

かここの自分の料當也とて逃り走り何事か
物多しハか慰めて世の何事ものに何し但
いなるものやと教りしハ殊るうなやあるは酒や
早う世先何事とて慇懃す礼をて別て
希り彼連人ハ一町をわたりておまひまへ
件ハ荒場を流るる連人ハの外の氣色となし世
乃の云りてすハ何事討すてけりや女ハ
ぬ多しと散くす詈りありてこそハ何れぞ
まうひくハ意恨のなきものぞれを討果す人き謂なし

そきつり我を腰ぬきと云く堪忍ぢうがうしめて
切りかゝるゝとあせとていひをぢあはして討くうひ
きりひるゝと負く取へ信人町中の謀きとつ
翔は多うかひ足し小件方人血刃るすぢうを
あれをこゝららる故るマも道よりるの要を問
てあうくと言ふ此を道行して追うを詞ぢを
逆行もかく切はせ首と堤立り王あまをるゝと
あはれを新あはひよるゝと怒るれをけくし
我小喧喧の相あまの切腹すゝゝと信人町

我の幸ハ某らういひハるゝい小利遠んとあしあ
町人あらうと推すの奉行取るはらうとあしあ
うばあしとつぢあさ上へあしあひましあは
喧嘩るゝとあしあ乱心なり何も新あまのあしあ
あしあしてあしあ

佐土原の城暴逆殺傷

日向佐土原の城嶋津右馬頭殿今をとりし今
至勝あハ不憐乃心たりて兄右馬頭殿不鳩毒
すく先返りして遂に去向しき嬌子飛弾

守殿家督受させしむりし又延宝六年毒を
喰ひしせて卒し一むひぬ飛彈守殿の嫡子又吉郎
殿ハ三歳了りておしせしゆく十五歳すその家督を
至胎後乃子息式部殿より主とぬひく二三年
経て何所之胎後家臣の松本左門とめされて又
吉市名ゆの祖父より薩州ハ大隅殿の令抱
然るし式部少輔後見ハ叔父詮ちきり也と
五きれし左門子達領掌し又吉家及家老
松本惣右衛門と拓きぬいりおししゆ

祖父先考ハ兩君ハ既了失せしをいふ今も吉市
君と國守と仰きたまふゆのゆも頼しすらし
之胎後式ア友心しはく國とねまぬひの千秋
萬歳の壽とさしつむく女ハ子孫ももゆし
つるべしゆ濃ヤく詞を綺て述しう惣
右衛門ハの介了顔色とくねのり實了りや
さししや女ハ似合らるひりるる去りも天
罰乃逃さるる女ハさるる如漢して止る人如
一發のゆりるをゆは密りゆりし上人口外を後

じと堅く誓言して立所ぬれぬのち至略後れ忍
心猶も止候左門ハ又吉多後と失りんとおもひしを
惣右衛門所りて小本意違かして先かきとす物
せんし方便とせざりし吉多後の母儀と惣左
と密りの所りしと跡形なきと云くしく信ひ
かゝひの薩州了討へはは大守大了りし
き多し則ち檢使と所りしれ何の穿議もあて
惣右衛門了切腹せよと所りしを清三意は上ハ
何分にも安まり入候うらむのりしり多然と

何多の是非了及ぶとて吉多後の抱守を招き我
今度讒者のありしとて込下のおに所りし名を没
後すてけすりいとも口折しきるに信し
了若殿乃由人抱大切了りしを朝夕ゆとて
念と入食也りや率了りしと吉多後と云く
云迄しは言了候ししは中合しきるも也
信し後くすおもひ合させと信し切腹し
信し左門ハ思ひのまに取計し村と三葉とて
先との時信入し者と飯食させ法が信者に

伊能一より憤るべき事におり一者數多りし
かど各口で閉てやぬ左門ハ程もみ多きを
矢りんとまゝひしりかど相心まじりて
今又遠ざりしは祈願所の國貫寺より
思ひきりぬる底了てみ多きと相伏るる頼
しうはまの傍れの氣色と見えりいにもまき
をかく領掌して別ち其夜ひそか薩摩に
こゝちの荒増訪しし了詳くふまを
扱ひらる思ふや波傍て止めたむし卜るま

興へさせぬ底了てたせとふとのち御朱印
政の式了あて名を願ひまじりしは公儀より
けり不審とて大隅殿へ送るけりしは大隅より
けり誰がやよとて穿議けりしは左門
を取爲けりしは貞享元年にけりしは
入しを同三のむと子三人薩州より
禁獄し拷問させられぬ前集の積悪れ
り白状のりして首刎らるる同年二月に
薩州より佐土原へ移りし諸士ありし

聖朝之始、後、奮、登、了、一、出、ら、ま、し、と、諸、士、取、巻、て、
此、の、腹、切、し、せ、世、間、へ、八、頓、成、と、披、露、せ、し、我、等、の、
近、從、六、人、も、薩、州、了、し、め、さ、れ、く、首、加、ら、ま、し、
佐、土、原、了、し、て、左、門、の、嫡、三、弟、め、弟、及、し、三、美、と、磯、上、
め、さ、り、し、め、さ、り、し、て、左、門、の、館、了、し、籠、り、し、
う、は、足、輕、三、人、了、し、急、き、め、の、者、と、め、討、取、り、の、後、
幕、り、城、より、下、る、ま、よ、と、左、門、の、極、也、の、中、に、う、り、
ま、り、し、て、ま、人、で、射、殺、し、流、炮、了、し、て、又、ま、人、の、洞、
中、で、お、ぬ、き、後、ら、る、僕、從、了、し、り、り、て、共、了、し、ぬ、

する、と、數、多、の、勢、も、取、り、ま、し、り、戸、板、を、お、お、
以、て、盡、し、く、め、し、し、命、と、ま、さ、り、に、防、き、戦、し、ら、ば、容、
易、了、し、責、が、く、く、て、火、矢、と、放、ら、燃、り、り、し、ら、ば、防、ぐ、
へ、ま、便、り、り、り、て、各、々、猛、焰、の、中、に、お、倒、れ、ぬ、男、
土、井、七、人、女、子、七、人、出、家、二、人、丑、一、人、都、合、三、十、七、人、同、
し、煙、く、り、り、り、大、坂、天、海、の、さ、ん、場、了、し、大、記、と、
り、る、傳、り、り、本、佐、土、原、乃、經、了、し、て、件、の、惡、逆、ま、く、
さ、り、る、人、了、し、り、り、し、と、左、門、の、お、ま、く、や、お、ひ、ま、ん、
強、ち、く、の、地、り、呼、下、し、り、じ、く、葦、室、と、い、ら、ま、

安穩了了々々せむらく毒とすめて殺し
あり又法東南禪寺一左門が弟は傍りし
大坂薩摩の益屋安了一内りて兄よりし者乃
重逆了了新後あもしく滅し一むひり六
某も通るべきなかりしに合罰りて
よもつろふれを五を右のいしく支了入沙門の
うれを給て構ふべきりてハゆるきれも一注國
方一相まらひはあうり左右すべきとつりしは
その夜邊らき納屋下りて自害せりやも

ト以て京都了送りつりし也

尾州廣澤親王

尾州松平出雲守殿屋敷の益屋廣沢角兵衛
貞享元年の春卒一ぬ息平九郎八十三歳了りて
儒とよみい歌と讀平跡拙りて俊逸あり
しかくみれ障りありて親の忌中より一族と
不通りしと却て幸のりにおひし若き同祀と
所川女御嘉歌舞了り日母とたかりし十五歳了りて
其の長き人守其の粧い無双乃負男了りし



大人の相巧し然るに茶道信人の萩野柳意と云
者此より出入せしり多財竊うり乳母も泣き
しハ平九郎よりハ正しく新院様の若宮にこそ
ついでせきまふ御母ハ院乃官女して汗腫胎
ありしより西飛りぬりてけ許り越角をきり
夫婦りつりぬいぬり妻細りつせりハ平
九郎平より高ぶししゆまハいゆりつり
ゆいとも左よりきりぬりゆりゆりゆり
ゆりゆり美麗と好あり柳意頓て竹腰

龍之介乃系る青木宗智とやうし遠付大内より
清のしゆりて披露し預りぬ道具と拵りて
ハ金銀の茶碗同く菘茗盆黒ぬり四足の長柄狭
箱梨地乃長刀との菊桐乃紋と付し冠産
衣との外諸色品とと浴下この器物衣類とと
まて負しゆりし平九郎と光仁親王と号し
宗智の姪の十歳よりや姫宮様として權の前
と名つる宗智の弟門前町の古著買七右衛門
と挑園中納言と名つる乳母の所縁の者の

伏見よりしと御後見權大納言より柳意と
正三位中納言行爾と名つと宗智と三位法仰
安齊と名つと宗智弟青木惣十郎と左少弁と
し宗智妹智乃上畑町の絹賣藤屋平兵衛と
右少弁とこれのり比面等以下諸役人もこれく
了りしは企や伯父の齊谷甚左衛門守付
近年不通のりちも捨て置やとて委細と
亮中へ訴へしうは竹腰龍之介家来竹腰宅たる
が行啓ありていともき登慈せくと云ふへ

足輕大勢馳せかこる多くと生捕親王と龍之介に
河原の多るのり板かこり榮乃幕と張きひく
番人と付しぬりこれ時乃歌り
思ひきや八重のりまは心て今九重の君とるは
柳意宗智の手鎖りて残る者もハこれ町に
河原多るのり柴山外記りこれとて京都へ詳
らけり河原のりて委く穿議りこれとて是
柳意の謀計り窮り親王ハ山村甚兵衛守付
切腹柳意宗智とこれ案の者とも申合りて首

別らき戸骸ハとまてて三へ下りて宅を
之切腹森佐兵衛と云ふ者も取持し切腹
せし女もハれつて死に放りしは女も

宝塔九輪下て鎌子とらるる京味精

石川玄叟後信州松本に在りて王子の宮に
の宮をとりて建し宝塔の九輪と云ふ鎌子
了鑄させられしより塔ハはれり破壊し
かば無名の振廻りし故に子をもて
家ほろびてし

以せられ京都に送り侍りし也

尾州廣澤親王

尾州松平出雲守殿屋敷の母と云ふ廣沢角兵衛を
貞享元年の春卒しぬ息平九郎ハ十三歳にして
儒と云ふ歌と讀手跡拙りしゆ俊逸小五
しかくみれ障りありて親の忌中より一族と
不通りしと却て幸のみにほひ若き同袍と
乃何れ酒宴歌舞し日毎とたらしし又來りて
其の長み人守の粧い毎双乃英界し

大人の相巧あたらしく然るに茶道ちやうだ信人の萩野はぎの柳意やなぎいと云
者もの出いで入いりせしつる多おほく何いかん竊ひそかにうけり乳母ちちがふ泣なり
しハ平九郎へいくわうよりハ心こころく新院しんいん様の若宮わかしむにせし
つるせきまふ御母おんちちハ院いん乃官女くわんじよつて汗膿あせう胎た
りししるまをいひ作なりてい許ゆるつ越角こしかくをかく
夫婦つまごつりつるいぬと妻さい細こつりつセルハ平
九郎くわう卒すより高たかぶししゆまははゆとせつせつより
しにも左ひだりつるきりゆりせしゆりつるゆりきり
このく夏なつと美麗うつくしと好このるり柳意やなぎい頓たふて竹腰たけこし

つてらと絶あきらたすちやりにるしは醫師いし来て氣き
解とと口くちつ入いれども歯はと噉はむりて明あは脈まと
りつハ怪あやしして目めの中なかも冷ひやしつりしつるゆ
りヤやと思おもふしちるに妻さいあつて病びやう人ひと乃耳みみに
口くちとせいしつるハ振ふるりいふとていくハ其その
ゆり口くちとつきて吞のりつる然しかまどもつりて
茶ちや用もちひがれハ心こころくあぬ流ながし令し三百兩さんひやくりやうつりし
と後のち家け子ことけり縁えんつり付つりつる

本ほん満まん寺てい像ざう評へい論ろん異い師し

洛陽本滿寺の日蓮の像ハ靈驗しくして
回宗の由を崇敬はつたにや内像とし損
き自ずて佛師と呼しし佛師がいつくは像
と日蓮の像を改めよのうにけりやと問へば
あるにそ弟子回宗の若法師はもつて合
文蒙り佛師乃云ふる厚もけり影ハ北山
并坐の望の土中に之を法華經讀誦の聲
ありしにけり寺の開山聲と云ふべし堀と云へば
ありけり大聖人の尊像としておはせし知れり

そ教をわける大悪人として散くつて
佛師堪かしてせられは各々解りては
し是ハ海ももろき元三大師乃影也と互に
口論せしつて餘多の法師佛師が頭を
損りしを内證として事おさめつて所
牧野佐渡守ありてつれつれに佛師
すそを證拠つて宣へば佛師が影
御首を破りてつれつれに良源とて慈惠と記
つれつれ若日蓮とつれつれに某の首

又修了りしつゝ問はるは一言乃返答なり
し中其方より醫師とく多病者生せしめよ
職人のよりしを其日數と積りて名代急度
りしつゝし擲きき向ひしとく内證より佳言
し白銀二十枚たけりしと也

新著聞集

崇厲篇第九

龍宮城を語て暗啞乃子と産
慈眼大師恭敬りしつゝと罷る
安宅丸の精緻しき人の踏りて罷る
柳津の比の魚と毒殺す
酒了り碎ねす
佛像の釘を掠めたらまら四指と損す
佐今谷乃稻荷の神本を伐

神木と高くと欲して材没く人死す
愛宕と凌蔑して餓死す
釋迦の像を罵りて顔格子に附く
蛇を殺してまら死す
天満宮と廢して七代早逝す
祇園御蔭の祟
古碑を礎とてかゝる靈魂夢に入る
蛇童子とくひ家族悉く滅す
天神の池の奥を捕獲熟して死す

庚申祭の夜切焚き入て死す
日待り候し誓て子焚き被て斃す
冬宮の者鹿とくひ身を終りて肉食す
惠美酒神君とくひ竹を枯す
高野大師の命り背き火災
曾我の神祠を輕蔑して狂乱す
愛宕の境内を横領して火災
問者の役を拒り脊に腫れ患て死す
女人高野山に詣り害せしむ

と人々驚き若狢狸の妖怪了やとたぬい〜
何の不審〜もさうもさうはしうに皆く安堵〜
その由と問し〜何れもハ某何公もさく私さう〜
て竜宮界了〜介ぬ竜神のつがが頻りに〜
ま〜かど極了〜諭〜合て涙さげりし〜彼〜
一ありと極り〜に扱ハ三子〜
拍子〜龍宮の〜い〜人の問〜
語多の勿〜堅〜制〜初〜
し〜道〜

そのち産〜子〜兄弟〜
かの界のり語れ〜ヤ此の立美ハ七千歳〜
了て天和三子の今了存命〜

慈眼大師恭敬り〜

江府東叡山了て兩大師の像天和三年五月に
等覚院了〜
恭敬等もほめ〜
召仕の僕了〜物つ〜
け〜比當院了〜元三大師〜

そのゆへに院を粗畧ししをせしむし何の辨へ
もなき小僧もいへし河圃のやもろくせし海諸人の
信心もろくろくぬれぬきこれ清き了叶ハれぬ先
大師了ハ何の清きもたハせぬれを自見道し
了ハ成がうくと怒りも多ハ各ハ怖れはし
早く清腹をすしめ河圃ホも老筆をすし
それく了了可憐了了恭敬了了は物の一すハ
夢の醒しるもくくに本性了了らぬ

安宅丸の程程しき人の端りて言はる

天和年中了了安宅丸の清紅を由きて解ひりて
それく了了拂ねりかしくぬひしゆるに柙原
和泉殿橋乃ほ屋布と糸と以者板を買求て穴
乃了了了もろくに其はめしはくひの女小物つきて
我ハこれあき丸の竟うし穢りもく某を穴乃
蓋しし穢りしき程人原了了踏せぬるは意恨
なき一くす取敷うんと言ひあり亭主たらしき
いそぎ作りくやんと改とまきまきで倅言せし
うは物附ハさあけりし

柳津の比の真と毒殺す

出羽の國柳津はの虚空の比の鮮魚おびてしく
つりし藩生下野守のふくまひくひるす
毒を流し入殺す人しとつりあれど是ハ性なり
殺生禁みの地なりしより連てりさめかど候ふ
西に一とむいず悉く殺まゆ此の日より十四
日男大地震心げりしうば山ハ崩れて洞あり
河ハうづりて陸となり衆中せんし民屋こくハ
塵類して人多く死し是より程く下野守

家原ちびの海ひハかたは海とがめりや

祭ほりし群ねす

江戸下谷の者上野の大師より日暮しつる日三
つとくとそ三は色もあろよきとち吞てかりし
候しねんし大師のりそりけうせとるるあや
ましくり口なりしとあるとらん延室八のめりせ
佛像の行とつすあ忽ち四の指と損す
延室八の八月廿八日是の大佛の入佛供養あり
しり大日如來のりしりの行とるるま

宗心しりる道心者像の腹約しそのび入り釘の
みら四の出るを後礎りてうち曲拔るんと
せしやと叶ハけりしうは腹と立て出し
堂の上より不器持末落りし指一本左右の
しんひしきしりたも怪衣ハ老よりけりしるま
もも打四本ちりし指まこはなせしも不器儀なり
佐分台の稻荷の神木を伐
ひらう佐分台のいりうとの列書ハ庭の谷の佐分台
とよ者の身ありしうは社内神木は老みけり

きると怪もなくまぐ切りてまでよれ物としるに
頼てゆとめつしよして妻子るにむすしりる
せれごよ憂りちりる老年は母は神見放逐
あて後世のり憂ふもあざりしうはる附三葉
りちる孫で切てえせよとけりて責るし
佐分台何と思ひ事りりや公ひてし地を
孫を切てえれえよとけりしる母は老母何し
我もひしり人の下ふハまけりし節あししき
ゆらくてハ鬻士とハ云がしとして返んく候

ゆく神皇の御まがらあるまの也と語りて何事ある
るのつぐきやとて成りやれる松十余人とち
てり成すもきせえり松ともしたもれつらき
多く世にありしうは誰とて成んと云ふものも
なかりし山一里をゆく蕪冷なるまゝにありたりし

愛宕と凌蔑して餓死す

大坂の玉置専卜といふ人の傳屋の紐治々長と申す
日蓮宗ありしる所も何他取より愛宕のれと櫻
てと土産するにたりし妻よりそび載りて長と申す

ゆのかそつ噴り松と押おれと引さき溝いりて
御工取するにゆとり山をく喰りに右のよに飛せ
しと赤拂りつら腫らむの堪なくして何の
所作もなく日とつよの身を送りしうは朝夕の煙
まぐりつて妻を離れし其の身はあまの倉
とあり別ち所へ逃れて餓死せりて也鞆乃
飛火ハ常るるしるるまもつとつは憂るる
り果しるるハ偏り神皇を欺り謂るる
釋迦の像と罪て顔持りし附く

京百萬遍回禄して後之代と東河原より移りぬ
一付釈迦の像大佛りれを清浄せよと教へし能
と車了して幸ありたり日燈大御言履打し毛踏
より教給ゆ一ス又ひあつ釈迦の首と引ひら
りり咎めされしとくゆるりしそのま放捨ふに
りり分て離れぬふ大るおとろきまゝく後言
き又ひくゆる離れし忽ち日蓮宗とありぬ
百萬返乃中善春院の檀那とありぬ又あり
釋迦堂入りたり大御言又女道主しありぬ

他を報して忽ち成す

出羽の國最上源五郎殿の菩提所童門寺の鎮守
ハ龍了してゆるりし古より云了へし乃名龍
乃不恒常まもぬ人あま集りしししと
まゝく又ありたり了るすの他の出ししと
追復りして報しありし報し者もたは
眼らしし立取し成しぬそのの進しる業を
みき平はむり煩しと也其あつち洞太くし
四足あり百八金く終り字せり他形してたり

地の成蛇今うろけ戸儀事の向の慶養寺より
此の所りしとあり

天満宮と廢し七代早起す

八條宮の桂川の下業より六の西尾海田打あり
河殿のりしるる丘林の中よりひくより天備宮
乃祠とせしむる宮のりるあり
日蓮宗より傾きむひく破祠と破りしゆ
跡より三平と神堂と建立しむひくは天備
宮枕よりまをかく廢社とにうり崇りあり

せんといふしむる驚きあまのあはれ
造りしは清浄のめし家名と常磐井又
系統とありしむるむひくは
七代より子孫しむるむひく

徳園寺の宗

尾州津島戸田の天王様より清浄といふ
よりありしむるむひくは
川へ流す其のありしむるむひくは

邦とすしめのみろく 汗流確と 其村其里
て踊るものあり 延宝二の戸四の汗流樂田
やうもく其比白鳥れ大山や仁左ありし者
帯を振へしやな人お候し 幸れものあり
候し 一りありて 亭にハ大山へおて
人か返りてしおれ用て 一夜も終る
人もあはれはれそ候し 一りありて
し 一りありて 大樂に
延宝の奴原より 秋かやありて
一りありて 一りありて

節り 荒終り 一りありて 一りありて
今村六年 一りありて 一りありて
其村長持寺 一りありて 一りありて
中村 一りありて 一りありて
一人はひて 汗流 一りありて 一りありて
ハ 一りありて 一りありて 一りありて
一りありて 一りありて 一りありて
一人も 一りありて 一りありて 一りありて
一りありて 一りありて 一りありて

山崎の法衣の古石ありて、然ぬと書集ハ、
山崎の燈とて、後主とて、起君とて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、

古碑と礎とを、一霊薨了入

奥州三本松の茶研ヤ久心とて、
同原の安念寺の山とて、
踏石とて、かゝるが甚しきとて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、

是ハハ何とて、連来れとて、怒れる眼は、
しきとて、胸とて、噪ぎ、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、
いふとて、いふとて、いふとて、

純童子とて、いふとて、いふとて、

伯母は生りて一族七十年人としく不
死し、教系しりしは都くしりて此十餘
りて死を逃る阿州へ来ておろし

天祿の比とてそへ祭つて死す

江戸赤新安楽寺へ東条氏を衆とて人抱び
来りて比乃魚とて社僧の信祐より作立て
神あり地魚と糖蕪しき食ふるいよむ心人
ハ程生れししりて理とて云なりし
報生れし人の控しにせすハ許し人そし

江網とて晩て及ひ海し網家し若黨依
ねしりて神あり魚の憎しやまらうマ
りど、命しり罰しり武系も大り發
契しり契し堪しりて終ふ身なり

庚申祭の夜勿契り入て死す

江戸本所二町目しりし和言師の焼酒を
飲り、庚申待しりり店者の妻は案じり
子と連て来り、食の身作りしり、俵に大なる
湯入り茶と熱しりしり、飯子とれ、湯めから

かく甬入て刻ぬいりくくと噪ももすぶき始りなく
さぬ之被女とれ龍すそまろ流産せし者れ助
して叙すくまりまのくく乃難すけいけり
しとめん寛文の年一のみけり

日待し何れ誓て子換て被て歎す

伊内屋安本原兵衛と云し人日待せりけり
下女賢とけりしとれれどそれ子ぬと慕て
はまろり一人すてはるるぬりせると云れり
下女腹と鼓して因果マ歎失りやせんか

能る程く一人すて憎き云さるなりけりれば子と
歎しけりしを重きと推し吐しして下女いそく
今既ハ治白まも也日天りあて歎なせ度けりよもは
件乃子湯玉の何なる程にせよる湯の湯と己
てあつて焼歎ちりさるると云へ海ハいつとく殺し
おもりん情なきりよして子と殺せりのみよや
主人もろと海を終る家とも進出されり

冬宮の者素とらひ身と終りて肉食す

伊内屋安本原兵衛と云し人日待せりけり
下女賢とけりしとれれどそれ子ぬと慕て
はまろり一人すてはるるぬりせると云れり
下女腹と鼓して因果マ歎失りやせんか

了て鹿を喰ひ了るるを以て其日終て食を喰ひ
所乃筈了て穢土より虫を堀出して喰ひ
人の疎んども後了るハ押原に堤了捨らるる猫
犬鹿等の或るを喰ひ寛文五年乃るあり

惠美酒神居をさし竹を枯す

阿州和食了往古より惠美酒の祠ありと
別起了移了なりて城を築き了に天下一國
一城の決定了了て後了破却了も阿州殿の老
臣山田織部公純了了て家来是依多氣地の所了

君臣を了所を付されが下人了物つき紙ハじり
此下了領了夷神あり社を築了りハ塚に
為り了ハ許了了今ハ塚もなりれん本の所了社了移
了了了作業了了憎き云や了了了痛くお擲
了了了此を以のあり了了了女一人あり
わが云了了疑り了了三日中に竹の林枯了
了了了と云了了に遠ハで影了了了教悉く枯了
了了了皆人大了貴びおを好了了頃了了了
了了了了了了了了了了了了了了了了了了

く侍しとらり

龍大師の命をさむき火災

龍大師の禁天のしん奈余乃者伊勢を野

と公けして百日紀州了て垢離とて十日數も

すす重りしり倣く垢離とておれおれ

走りぬり吾ハ山乃大師ちりけ空の都

野見放遊了して佛法とてび暮す

ワ山一歩と運ぶもかくと想ふ利終乃の

了れ心とけり衰了とてゆる人々後

よく信とられと云くは村乃者どもありぬりて

是ハ柳の程乃付るべし鼻とすべし犬小柳の

よりく人云曾りありの者大く嘆てぬりて

大悪人ありおれとて大慈悲とて念ひにんぬ

けりハ人んとやいてまぬらハま有申

付本と黒土アかして思ひあらせん大時悔大

半世のありとて云てまのつぎく出

人々歸り付て笑ひりてけり俯伏之御ま

絶たしありお良けりて獲まるともい

そのまはりのごとく殺しし例乃垢離とせりしこ
う野流うり若き傍の水と越すし白くや怪し
くたすまふし神よりひりと抱はるまき後
まくと理とこれまをのりなる意ありにも
猶ほうろくするゆきでせりし地の次の月十六日
一村悉く焼矢しゆり彼垢離の家の家
り何の隙うろくまき寛永十三年十月の也
曾我の神祠と輕蔑して狂乱す

曾我兄弟乃祠ハ富士乃下野にありしに漆喰ハ

兄弟のまき本尊れ弥陀の三尊あり兄弟の影像ハ
前をうしてありしとゆり土抄の家位書山録に
照婦して奪いしとまき今ハ弟乃福封院に
ありはるしと此の邦乃信行不忌ねとせり
射るま似して此の麻比がすらむとまき
あきあふといふるゆりやと法湯とすくせ
ときあはく大切なる神祠と怪んと茂ふ
らう崇りし海にわらふとあり人々怒るま
海にまきしは字をうりしゆりまき

愛宕の境内と横俣にて火災

愛宕山の麓より水尾村より堺杭や愛宕山に於て
多うとありしも愛宕の傍に於て火を手に取り
やくとけまは惣切落合ておの村より使とせまられ
西川せまれの山目松金周防を焚き討つてはしく
穿議のりまゝに付おの村の長本村家より火たつり
おて同意せし人の家もつりまゝに飛火して
焼失せし一回に新むらびりも不問意の者おれ
りハ何の恙かありしと地村の者もいりしに貧者く

件の事ハまゝ何れかくひらに徒言して止し

問者の役と拒て脊に腫れ患て或り

山西南院良尊ハ博孝弘老の人よておりき
りも付勸學院の會議の節に及いけ人間者に當
りて命りりしやま初ハ公方とてまじしやされおれ
まじけむむの問者といまゝいとまれありおのころ
塔僧院祐能より受り良尊ハ君らとてあらに
明神素臨くしぬい又大師をたりにてけそのハ
お代の孝通くしぬい命助ありせしぬいと

明神の宣く貴坊とお候して問者に何ぞと
能くおとす所は新穀より見小姓をりま
日本國より何の海の大切の山の糧と
費をその基非道の御り余助けり
大弓引はぐひ射をまゝ思ふ人夢えぬ結
毛驚きやうとて良尊を訪まあらに俄
背中に腫物いできて二三日は寝て遷化
れ
女人高野山へ詣て害ちり

寛文六年八月廿日越前より女順礼を望ぶと登り
と道掃除の者足とぐめ爰ハ女の来る所と何ぞ
とくく飯をまよも進中ししと立ぬるの三度
たぐひと終るおと入り登山とありとて谷云隔
く向いの嶽乃松の枝をかめ女を引きて懸て
し次の日えとて頓ておろし一葬しと三度まで
目取つたあつしと法性院すゝぬびく衰れ
つりとも念比つとあつしぬひし何の内
かろしとれ此風ぬとあつしと志バク損し

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text, consisting of several lines of cursive script.

Large area of the page that is mostly blank or contains very faint, illegible text.

